

そして、一九八〇年代の中盤以降、「街占」的な空間の表現は減り、〈占いの街〉的な空間の表現が大半をしめるようになってきている。実際、今日、例えば神戸の繁華街では「街占」は必ずしもなくなってしまうわけではないが、ほんのごくわずかしか見ることができない。

〈占いの街〉という占い空間の出現は、一九八二年にオープンした神戸の「ジェム占いの街」が最初であるようである¹²⁾。なお「ジェム占いの街」は、経営コンサルタントがどのようにすれば客が入るのかということを考えて、つくったものである。この後、これを模倣したと思われる〈占いの街〉が多数現れ始める。ちなみに東京で有名な〈占いの街〉としては原宿の「塔里木」があり、それは一九八六年にオープンしている。図表3には示していないし、上ではふれなかったが、この「ジェム占いの街」ができた一九八二年から翌年の一九八三年にかけて、神戸での占いの店舗は9件増加している。しかし、この期間に増加した店舗はその名称から判断して一すなわちそれらは個人名による店舗であった一、〈占いの街〉的なものではなかった。一九八六年から一九八七年にかけて、〈占いの街〉という占い空間にとってはひとつの転機がおとずれているように思われる。すなわち、この時期そしてこの時期以降、神戸において〈占いの街〉という形態の店舗が増えだすからである。そしてまた、ほぼ同時期に、雑誌に〈占いの街〉に関する記事が掲載されるようになってくるからでもある。例えば、一九八七年の雑誌記事の見出しとして次のようなものがある。

「手相、四柱推命、水晶よりどりみどり 『占いのデパート』で解決する悩みとお値段」『フライディ』1987.1.2

「ここが原宿の新名所!? 若者の街で『占いの館』が大繁盛」『週刊ポスト』1987.3.27

これらは主として神戸や東京などの〈占いの街〉を紹介したものであるが、ここからそうした空間が注目を浴び始めたことがわかる。いずれにしろ少なくとも言えることは、一九八〇年代後半から現在にかけて、比較的大きな都市であれば、

〈占いの街〉という占い空間はよく目にできるものとなってきているということであろう。では、〈占いの街〉という占い空間の形態はいかなる特徴をもち、そして、その空間の形態は従来からの占い空間のそれとどのように異なっているのだろうか。

三. 〈占いの街〉という占い空間の形態の特徴

〈占いの街〉という占い空間は一九八〇年代になって現れたものである。その空間は時期ばかりでなく、その形態においても、それまでの占い空間形態—「宅占」、「テナント」、「街占」、「イベント」とは異なる。〈占いの街〉の個々の個室はテナントとして貸し出されているものであり、当然、テナントではない「宅占」とは異なるし、固定した店舗をもたない「街占」や「イベント」という空間の形態とも異なる。そして、「テナント」という点での差異については既述した。すなわち、〈占いの街〉は占いを施す空間、言い換えれば、個室が集散的に配置されている点で、他の「テナント」による形態とは異なっているのである。また、〈占いの街〉による形態とそれ以外の形態とでは、集客に対する機会が異なっているだろう。なぜならば、後者はどちらかと言えば占い師自身の実力や知名度によって集客機会をもつのに対し、前者は〈占いの街〉という占い空間の形態がもつ特徴によっても集客しうる機会をえているように見えるからである。つまり、〈占いの街〉という空間形態は個々の占い師の集客能力は低くとも、それ自体の特徴—集散的形態であることや特定の占い師の占い技法のパフォーマンスによって、話題（注目）を集めて、集客機会を増やすことが可能だからである。事実、例えば「ジェム占いの街」はその集散的形態そのものをキャッチコピーとしたり、注目をあびそうな占い師を広告塔にして、その存在を世に知らしめている。

ところで、筆者のこれまでの占い師に対しての調査から、占い師には一匹狼的なところがあり、あまり他の占い師について良くは語らないことが、言える¹³⁾。このことは集散的形態の〈占いの

12) 山下嘉範 (1985) を参照。